出会い（15）

修道生活きのうきょう

メア・クルパ
(わたしのあやまち ― Mea Cu1pa)

奥村　一郎

奥村　一郎 / おくむら・いちろう
1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。
著書は、『断想』『主とともに』『祈り』（女子パウロ会）、『わたしの心よ、どこに』（サンパウロ）、『聖書深読法の生いたち』（オリエンス宗教研究所）など多数。

1.伝統と創造

どの社会であっても、「伝統と創造」とは不可分であるという、文化史上の大原則は変わらない。カトリックの修道生活においても、このことは同様である。一般にあまり知られていない領域かと思うが、カトリック教会自体にとっては、創立二千年来の、最も大きな変革であった出来事は、「第二バチカン公会議（1962－65）」である。

全世界の司教がローマ法王を中心として集まる会議を「公会議」というが、今回の会議は教会の全面的な抜本的刷新を実現したもので、まさに二千年の歴史のなかで、前古未曾有の出来事であった。過去の伝統に基づいて未来を創造するということは、全くの新しい誕生とさえいえる。その誕生に至るまでには、しばしば保革激突の危険を免れることはできない。

思い出せば、十年ほど前のこと。西欧カトリック修道会の、主な代表として、二十人あまりの修道者が日本の禅道場で一か月の修行体験をしたことがある。その間に道元禅師の創立になる福井の名刹、永平寺に宿泊、前晩から早朝の勤行と座禅に一同参加させてもらった。そのあとの話し合いで、オランダのトラピスト大修院長の発言が今も耳新しく響いてくる。「私たちカトリックは、今までの古いものを捨てすぎた。それに対し、あなたたち禅寺では、あまりにも古いものに執着しすぎる」。

当時、カトリックにおいて廃止された伝承のなかで、大きなもののひとつとして「言葉」がある。すなわちラテン語である。公会議以前では、聖書も典礼も、神学の授業も、試験も、書くこと、話すこと、それどころかレクリエーションでのスポーツ用語に至るまでラテン語が強制された。強力な洗脳手段! ともかくそれまで一千年余、教会公式用語であったラテン語は今では半永久的死語になってしまった。

それに伴う功罪の一例として「メア・クルパ（MEA CULPA）」という、れっきとした古典神学用語がある。前号でとりあげた「トンスーラ」より内容の重い言葉で、「わたしのあやまち」という意味。この言葉は、かつてのミサ聖祭の冒頭において「メア・クルパ、メア・クルパ、メア・マックシマ・クルパ（Mea Cu1pa, Mea Cu1pa, Mea maxima Cu1pa）」と唱えながら、三度胸を打つ習慣があったことに由来する。訳せば「わたしのあやまち、わたしのあやまち、わたしのおおきなあやまちでした」。今の典礼では「わたしは思い、ことば、行い、怠りによって、たびたび罪を犯しました…」という形になり、「クルパ（Cu1pa）」という言葉もなくなった。今では、中世の厳しい修道生活を懐かしむ、思い出のラテン語と化してしまった。「クルクルパー」などと、ふざけてはならない。どこか似たところがあるようだが。

2. 修行・荒行・大荒行

なにしろ、バチカン公会議以前のカトリックの修道生活は、今では想像のできないほどの修行の積み重ねであった。それこそ、よく知られた比叡山の大荒行千日回峯行にも勝るとも劣らぬほどのものがあった。著者の所属するカルメル会という観想修道会では、毎日の夜半の祈り、生涯肉食を断つ永久小斎、それに、毎年9月14日、「十字架称賛」の日から、翌年の復活節までの約半年は「大斎」といわれる厳しい断食期間。また水なども、食事外では、院長の許可なくしては、一滴も飲むことができない規則があった。

そのほかにも、体の鞭打ち、傷ついて血がでる針金の腹巻きなど。さらに、食事中の苦行などについては、本誌の中ですでにのべた［『VITALITE』誌34号、35号の「出会い」（12）、（13）］。

また、朝寝坊して早朝礼拝に遅れたり、皿を落して割ったりすると、夕食の終わりのところで、食堂の真ん中にでて、院長のほうにむかって跪き、割った皿の欠片（かけら）を首に下げ、全員の見つめる中で胸をうちながら、「メア・クルパ」と言いつつ、あやまちのゆるしを乞わなければならない。

次に院長がそのための償いを命ずると、深々と体を曲げて（汚い）床に接吻してから自分の席にかえる。ある時、眼鏡をこわした新米修道者が「クルパ」をした時には、「自分の眼鏡とは、なにごとだ?

フランス・タラスコン市カルメル会修道院食堂

私たちの眼鏡といえ。すべては、私たちの共有財産だ」と説法されたのは印象的だった。ふと、その時うなずいた。「私たちは皆、神の共有財産、と言うことなのかな。たぶん、あやまちや罪までも、ひっくるめて」。お気の毒な神さま、有り難い神さま!

とにもかくにも、大小様々なあやまちについての絶え間ない糾明と反省が、その頃の修道生活を特色づけていた。文字通り「メア・クルパ」の霊性であった。もちろんそれ自体悪くはない。キリストの十字架に結びつく霊性だからである。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」(ルカ9,23)というイエス・キリストの教えを忠実に生きようとしたのが、以前の霊性であった。文字通りの自己放棄である。

しかしキリストの言葉は、そこで終わるのではない。「自分の命を救いたいと思う者はそれを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失うなら、なんの得があろうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか」(マタイ16,25-26)。

表現の発想は異なっても、禅の傑僧道元の名言も、それに近い。「仏道をならふといふは、自己をならふ也。自己をならふといふは、自己をわするるなり」(『正法眼蔵』現成公案)。自分に死ぬことによってのみ、真の自己になる。「メア・クルパ」の霊性を、極めてのみ、キリストの復活秘義に出会う。ここでもまた禅の言葉が思い出される。「生きながら死人となりて、なり果てて、思いのままにする業ぞよき」(無難禅師)。

3. 草にすわる…

わたしのまちがいだった
わたしの まちがいだった
こうして 草にすわれば それがわかる　　八木重吉

禅者には「罪犯弥天(ざいぼんみてん)」、念仏者には「罪業深重(じんじゅう)」の魂の疼きがある。

次に、中国の聖者のことばも、揆(き)を一つにする。

夜 深く人静かなるとき、独坐して心を観ずれば
始めて妄(もう)きわまり、真独り露わるるを覚ゆ
『菜根譚(さいこんたん)』

ときとところ、宗教も文化も、はるかに異にしながら、そこに息づく人間の魂の、底しれぬ痛みは変わらない。

にしても、「メア・クルパ(わたしのあやまち)」の、ことばさえ色あせてしまった現代人の救いは、どこにあるのだろうか。

西暦二千年にあたり、ローマ教皇がカトリック教会を代表して、これまでに犯した多くの罪のゆるしを乞うた「公式のクルパ」が、新しい世紀の希望を与えるものとなれば、さいわいである。

P.G.I.のお知らせ

フォト・ギャラリー・インターナショナルは
9月25日より芝浦に統合して、リニューアルオープンいたしました。

Photo Gallery International – New Opening

■ ギャラリー・アーティスト展
2000年9月25日(月)―10月31日(火)
石元泰博、伊藤義彦、今道子、三好耕三、原直久、川田喜久治、
奈良原一高など、日本人作家20余名の作品を展示します。

■ 伊藤義彦作品展　「パトローネ」
Yoshihiko Ito　　"Patrone"
2000年11月6日(月)―12月16日(土)

フォト・ギャラリー・インターナショナル
東京都港区芝浦4-12-32 TEL.03-3455-7827 FAX.03-3455-8143
JR田町駅芝浦出口(東口)より徒歩10分[入場無料]
営業日:月ー金 11:00ー18:00　土 11:00ー17:00
休館日:日曜日・祝日
＊P.G.I.についての詳しい情報はホームページ(http://www.pgi.ac)をご覧下さい。

表紙の写真

クリス・スティール=パーキンス
エチオピア, 1988年

ー 表紙へのメッセージ ー

一粒の麦は、
地に落ちて
死ななければ、
一粒のままである。
だが、死ねば、
多くの実を結ぶ。

(新約聖書より引用)